様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21390591
研究課題名（和文）　家族同心球環境モデルに準拠した家族介入モデルと標準家族看護計画の開発
研究課題名（英文）　Development of a family intervention model and standard family health care nursing plan based on the Concentric Sphere Family Environment Model
研究代表者　法橋　尚宏（NAOHIRO HOHASHI）
神戸大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：60251229

研究成果の概要（和文）：新しい家族看護理論として“家族同心球環境理論（CSFET）”を提唱し，これに立脚した“家族環境アセスメントモデル（FEAM）”を完成させた．同時に，“家族症候”“症候別家族看護”“経過別家族看護”などの概念や方法論を提唱した．さらに，国内外のこども保育期・教育期家族を対象として，家族内部環境支援，家族システムユニット支援，家族外部環境支援で構成される“家族環境支援モデル（FEIM）”，6 つの“家族症候”に対する“標準家族看護計画”の試案を完成させた．

研究成果の概要（英文）：The ″Concentric Sphere Family Environment Theory (CSFET)″ was proposed as a new family nursing theory, and the ″Family Environment Assessment Model (FEAM)″ on which it is based was completed. At the same time, ″family signs/symptom,″ ″family health care nursing based on family signs/symptom,″ ″family health care nursing based on progression″ and other concepts and methodologies were proposed. In addition, for families with nursery school-age children and child-rearing families both in and outside of Japan, a ″Family Environment Intervention Model (FEIM)″ consisting of nursing intervention for family internal environment, nursing intervention for family system unit and nursing intervention for family external environment, and a ″standard family health care nursing plan″ for dealing with six ″family signs/symptoms″ were tentatively completed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総　計	6,900,000	2,070,000	8,710,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：家族看護，家族同心球環境モデル，家族環境アセスメントモデル，家族環境支援モデル，家族症候，家族機能，標準家族看護計画

1．研究開始当初の背景

近年，わが国では家族問題が社会問題と化し，家族のウェルビーイングの保持・増進を図る家族看護実践が急務となっている．例えば，家庭で起こる子どもへの虐待は，家族関係の歪みが弱者である子どもにしわ寄せさ

れたものである．また，地域連帯感の希薄化という社会の影響により，子育てをしている家族が孤立しやすくなっている．家族と社会との関係における家族機能の低下はすでに実証されていることからも，家族（家族システムユニット，家族内部環境）へのインターベンションのみならず，社会（家族外部環境）へのインターベンションも行う必要がある．

既存の家族アセスメント／支援モデルには，海外で開発されたカルガリー式家族アセスメント／介入モデル，日本で開発された家族エンパワーメントモデルなどがあるが，現状ではアメリカやカナダで培われてきたものが多用されている．また，家族環境に着目したり，家族環境を広範囲に捉えたものはなく，家族環境へのインターベンションの必要性が指摘されている．

2 つの基盤研究(B)（平成 15 から 17 年度，平成 18 から 20 年度）による助成を受け，家族環境をホリスティックに捉え，家族システムユニットを理解するための枠組みとして“家族同心球環境モデル”を初期開発した．ここで，家族環境は，家族内部環境と家族外部環境からなる．“家族同心球環境モデル”は，家族内部環境システム，ミクロシステム，マクロシステム，スープラシステム，クロノシステムの 5 領域で構成され，その相互作用と交互作用を説明する．さらに，このモデルにもとづいた“家族環境アセスメント指標”“家族内部環境地図”などを開発した．しかし，現在は，家族アセスメントモデルまでが初期開発できた段階であり，家族支援モデルの開発が残されており，これまでの研究をさらに発展させ，新しい家族支援モデルである“家族環境支援モデル”を開発することが求められている．

また，萌芽研究（平成 17 から 19 年度）による助成を受け，“家族エスノグラフィー”（面接調査，参加観察などで構成）により家族のウェルビーイングをアセスメントする方法，アセスメント尺度の“家族環境評価尺度”を開発した．この質的評価と量的評価を活用して，本研究で開発する家族支援モデルのインターベンション効果を評価できるようになっている．

2．研究の目的

過去の研究の集積により，家族のウェルビーイングに影響する要因を明確にし，家族を理解するための枠組みとして“家族同心球環境モデル”を新しく提唱し，この理論にもとづいて家族システムユニットのウェルビーイングの状態をアセスメントするためのツール群を試作した．アセスメント項目とその細目を構造化した“家族環境アセスメント指標”，家族員の関係性を可視化する“家族内部環境地図”，家族のウェルビーイングの評価尺度である“家族環境評価尺度”“家族エスノグラフィー”による家族のウェルビーイングの評価方法などを試作済みである．しかし，このモデルにもとづいた家族へのインターベンション方法の構築は，これからの研究課題として残されている．

本研究の目的は，これらの研究成果をさらに発展させ，試作したツールなどを完成させ，この独自の理論／モデルにもとづいた家族インターベンションモデルを新しく開発し，その効果のエビデンスを明確にすることである．とくに，“標準家族看護計画”を構築し，看護職者に対して家族看護の具体的な方法を提供することで，その臨床応用を確立することを目的とする．これらにより，家族看護にかかわる看護職者の実践能力の向上に貢献し，家族のウェルビーイングの保持・増進を可能にする．

3．研究の方法

過去の事例検討，国内外の看護学・医学・社会学・福祉学などの文献検討，“家族エスノグラフィー”（兵庫県，長崎県，香港，アメリカでの面接調査，参加観察など），ミックス法を用いた家族機能調査，臨床家への面接調査などから，新しい概念である“家族症候”を導き出し，それを類型化して，それぞれの判定状態を一覧にした．さらに，“家族症候”に適用できる家族支援は，“フロネーシスとエビデンスに基づいた家族支援”であることを明らかにし，“症候別家族看護”と“経過別家族看護”を開発した．ウェルビーイングな家族への予防期家族看護，イルビーイングな家族への急性期家族看護・慢性期家族看護・終末期家族看護について，それぞれに対する“標準家族看護計画”（第 1 案）を作成した．また，家族情報収集のフォーマット（神戸式），家族アセスメントのフォーマット（神戸式），家族関連図（神戸式），家族経過図のフォーマット（神戸式）などを開発した．これらは，“家族同心球環境理論／モデル”に立脚した“家族環境支援モデル”の基礎になるものである．

引き続き，国内外の文献検討，過去の事例検討，国内外での家族エスノグラフィー，ミックス法を用いた家族機能調査，臨床家への面接調査などから，“家族症候”（第 2 案）を導き出した．“家族症候”（第 2 案）は 20 種類で構成し，それぞれの判定状態，“家族症候”の危険因子・原因因子，予防因子・阻止因子を明らかにした．さらに，家族支援にあたって必要となる“家族支援の優先順位の三角錐モデル”を構築した．

国内外（兵庫県，長崎県，香港）での家族エスノグラフィー，ミックス法を用いた家族機能や“家族症候”の調査，臨床家への面接調査などからこれまでの研究を推進し，“家

族同心球環境理論”（バージョン 2.4），それにもとづく“家族環境アセスメントモデル”（バージョン 2.4）を完成した．

さらに，国内の家族看護学の専門誌『家族看護学研究』『家族看護』や各種ジャーナルなどのシステマティックレビューを行い，臨床家への面接調査などから，53 の“家族症候”を同定し，“標準家族看護計画”と“家族環境支援モデル”を初期開発した．

4．研究成果

（1）家族看護理論“家族同心球環境理論（CSFET）”の改良と臨地応用

家族現象の記述と説明を行い，予測と統制を可能にし，体系的な視点を提示する新しい家族看護理論として，“家族同心球環境理論（Concentric Sphere Family Environment Theory：CSFET）”を提唱し，その改良を続けている．CSFET を図式化したのが“家族同心球環境モデル（Concentric Sphere Family Environment Model：CSFEM）”である．2011 年に『Journal of Transcultural Nursing』にその開発論文が掲載された．その後も，概念，定義，命題の追加，変更，削除を繰り返しており，“家族同心球環境モデル（CSFEM）”はバージョン 2.4 が最新版である．

“家族同心球環境理論（CSFET）”は，家族支援のための理論体系，これを基盤とした実践体系をもつという特徴がある．看護職者が家族を看護する必要性を認識していながらも，家族看護の現場適用が困難になっている．“家族同心球環境理論／モデル”は実践的理論／モデルであり，家族支援が難しいと感じている看護職者に対して，とくにこれを基盤としたツールによって具体的な家族支援の方法を提供できる．

“家族同心球環境モデル（CSFEM）”は，家族のウェルビーイングに作用する家族環境を説明している．これは，3 つの評価軸で広がる空間の中に 5 つのシステムが位置づけられており，3 次元構造で表現されているので，視覚的にとらえると理解しやすい（図 1）．3 つの評価軸（座標軸）は，水平軸が構造的距離と機能的距離，垂直軸が時間的距離である．5 つのシステムは，家族外部環境であるスープラシステム，マクロシステム，ミクロシステム，家族内部環境である家族内部環境システム，時間環境であるクロノシステムである．家族のウェルビーイングの状態をアセスメントするための“家族環境アセスメントモデル（Family Environment Assessment Model：FEAM）”の改変を続けており，最新版はバージョン 2.4 になっている．

また，“家族環境支援モデル（Family Environment Intervention Model：FEIM）”を試作し，その実証的検証を行っているところである．FEIM は，家族内部環境支援，家族システムユニット支援，家族外部環境支援で構成されている．

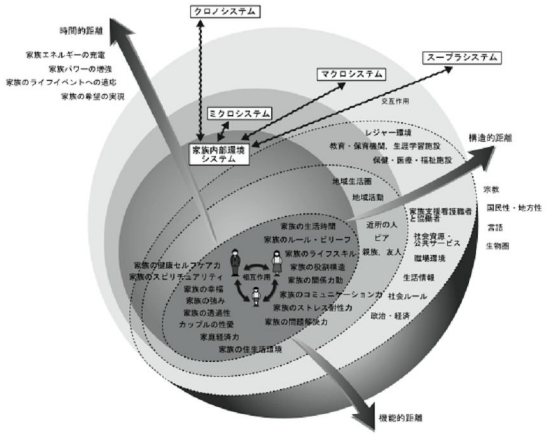

図 1．家族同心球環境モデル（CSFEM）（バージョン 2.4）

（2）“家族症候学”“家族症候”の提唱と臨地応用

新しく提唱した“家族症候”とは，「主観的および客観的な家族データにもとづき，看護職者が総合的に査定した家族システムユニットの困難現象」のことである．数多の家族事例検討や長年の臨地経験などをとおして“家族症候学”を開拓し，最新の“家族症候”チェックリスト（バージョン 2.4）には，53 の“家族症候”（例えば，「家族の勢力構造の編成不調」「家族レジリエンスの発達不足」「家族インターフェイス膜の選択性の障害」「家族員間での役割期待の乖離」「家族システムユニットストレスの過剰負荷」など）がある．

“家族症候”は，家族システムユニットの問題現象を複数の看護職者で共通認識するための共通言語といえる．“家族症候”とその原因構造によって家族支援が異なるので，“家族症候”を特定することで，看護職者が実践する家族支援の焦点を定めることが可能になり，系統的な家族支援を実現できるようになる．

（3）“症候別家族看護”“経過別家族看護”の提唱と臨地応用，“標準家族看護計画”の開発

家族支援にあって必要な 2 軸のマトリックスとして，“症候別家族看護”と“経過別家族看護”を提唱した．すなわち，“家族症候”を経時的にとらえることで，家族看護における経過は，ウェルビーイング期の“予防期”“潜伏期”，イルビーイング期の“急性期”“慢

性期”の４期に分類し，さらにその経過にともなって“回復期”“終末期”の 2 期に分類している．そして，各期に応じた家族支援を“予防期家族看護”“潜伏期家族看護”“急性期家族看護”“慢性期家族看護”“回復期家族看護”“終末期家族看護”に分類することを提唱した．

家族がおかれている期によって家族支援目標が異なるため，経過別で“家族症候”をとらえる必要がある．すなわち，家族システムユニットがどの期にあるのか，今後どの期に移行するのかをアセスメントし，その期の特徴を踏まえた家族支援を実施する必要がある．

また，同じ“家族症候”を呈している家族には共通した特徴があるので，“家族症候”ごとに家族支援方法を具体的に提示した，いわゆる“標準家族看護計画”の活用が有用である．“標準家族看護計画”は，“家族症候”，判定状態，家族看護問題，全体目標，支援目標，具体的支援で構成されている．現在，6 つの“家族症候”に対する“標準家族看護計画”の試案を完成させた．

5．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①Development and testing of the Survey of Family Environment (SFE™): A novel instrument to measure family functioning and needs for family support, Naohiro Hohashi, Junko Honda, Journal of Nursing Measurement, in press

②Development of the Concentric Sphere Family Environment Model and companion tools for culturally congruent family assessment, Naohiro Hohashi, Junko Honda, Journal of Transcultural Nursing, 22(4), 350-361, 2011. doi:10.1177/1043659611414200 (Impact factor: 0.953)

③最新・家族看護学研究レビュー (1)，法橋尚宏，本田順子，家族看護，9(1)，132-137，2011

④Family functioning of child-rearing Japanese families on family-accompanied work assignments in Hong Kong, Naohiro Hohashi, Junko Honda, Journal of Family Nursing, 17(4), 2011, 485-510. doi:10.1177/1074840711424284 (Impact factor: 1.689)

⑤家族機能のアセスメント法：FFFS 日本語版Ⅰの手引き，堀口和子，法橋尚宏，メディエーション研究，2，91-93，2011

⑥「新しい家族看護学」の今の時代に，法橋尚宏，家族看護学研究，15 (3)，1，2010

⑦異文化家族看護学の構築：国外の新規フィールド開拓から家族エスノグラフィー実施まで，法橋尚宏，日本看護科学学会誌，30 (2)，103，2010

⑧妊娠先行型結婚に関する国内文献の動向と家族看護学研究の課題，本田順子，西元康世，法橋尚宏，平谷優子，家族看護，8 (1)，118-128，2010

⑨Family functions of child-rearing single-parent families in Japan: A comparison between single-parent families and pair-matched two-parent families, Yuko Hiratani, Naohiro Hohashi, Japanese Journal of Research in Family Nursing, 16 (2), 56-70, 2010

⑩離婚を経験した養育期のひとり親家族の家族機能と家族支援，平谷優子，法橋尚宏，家族看護学研究，15 (2)，88-98，2009

〔学会発表〕（計 20 件）

①The cultural and social factors of postnatal depression in Japan: The meta-analysis of previous studies, Junko Honda, Naohiro Hohashi, Sharron SK Leung, 37th Annual Conference of The Transcultural Nursing Society, 2011 年 10 月 19-22 日，Las Vegas, NV (U.S.A.

②Factors in disparities between individual family members in family functioning assessments, Junko Honda, Naohiro Hohashi, Shota Kakazu, 2nd International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (WANS)/22nd International Nursing Research Congress of Honor Society of Nursing, Sigma Theta Tau International, 2011 年 7 月 15 日，Cancun, Mexico

③Graduate-level Educational Methods in Family Health Care Nursing for Advanced Nursing Practice (Main Session), Naohiro Hohashi, 10th International Family Nursing Conference, 2011 年 6 月 27 日，京都府・京都市

④家族症候学の基礎と展開（ランチョンセミナー），法橋尚宏，樋上絵美，本田順子，日本家族看護学会第 18 回学術集会，2011 年 6 月 26 日，京都府・京都市

⑤造血幹細胞移植を受けた患者と家族員の心に関する文献検討，森下紀子，法橋尚宏，日本家族看護学会第 18 回学術集会，2011 年 6 月 26 日，京都府・京都市

⑥家族看護学パラダイムのルネサンス（会長講演），法橋尚宏，日本家族看護学会第 18 回学術集会，2011 年 6 月 25 日，京都府・京都市

⑦交流集会　家族支援場面における症候別

家族看護のあり方，法橋尚宏，本田順子，樋上絵美，第30回日本看護科学学会学術集会，2010年12月4日，北海道・札幌市
⑧The current status of family health care nursing in Japan and their fields of practice, Naohiro Hohashi, Junko Honda, Kazuko Ishigaki, 2nd Japan China Korea Nursing Conference, 2010年11月20日，東京都・中央区
⑨国際共同研究の形成と質的研究の展開，法橋尚宏，弘前大学大学院保健学研究科平成22年度第2回大学院活性化講演会，2010年11月5日，青森県・弘前市
⑩超低出生体重で生まれた子どもの家族の家族レジリエンスに関する研究，日本家族看護学会第17回学術集会，永冨宏明，法橋尚宏，2010年9月19日，愛知県・名古屋市
⑪家族看護のイノベーション：私の考える家族看護のイノベーション，日本家族看護学会第17回学術集会，法橋尚宏，2010年9月18日，愛知県・名古屋市
⑫家族機能状態を評価するための“家族環境アセスメント尺度（SFE）”の開発，日本家族看護学会第17回学術集会，本田順子，法橋尚宏，2010年9月18日，愛知県・名古屋市
⑬事例文献検討から抽出した家族症候のレパートリー，日本家族看護学会第17回学術集会，樋上絵美，法橋尚宏，2010年9月18日，愛知県・名古屋市
⑭超低出生体重で生まれた子どもの家族の家族機能状態と家族支援の優先度に関する研究，日本小児看護学会第20回学術集会，永冨宏明，法橋尚宏，2010年6月27日，兵庫県・神戸市
⑮離島に住む子育て期家族の家族機能の実態と家族支援：SFE（家族環境アセスメント尺度）を用いた全数調査，日本小児看護学会第20回学術集会，平谷優子，谷口菜那，法橋尚宏，本田順子，2010年6月26日，兵庫県・神戸市
⑯Transcultural Research into Family Functioning and the Effects of Living Activities Time on Family Functioning, Junko Honda, Naohiro Hohashi, 4th Hong Kong International Nursing Forum, 2010年6月4日，Pokfulam・Hong Kong（P.R. China）
⑰異文化家族看護学の構築：国外の新規フィールド開拓から家族エスノグラフィー実施まで，法橋尚宏，第29回日本看護科学学会学術集会，2009年11月27日，千葉県・千葉市
⑱The family environment of child-rearing Japanese families on accompanied assignments in Los Angeles, Junko Honda, Naohiro Hohashi, 35th Annual Conference of The Transcultural Nursing Society, 2009年10月14日，Seattle・WA（U.S.A.）
⑲A review of literature related to the effects on families and family function following the discharge from hospitals of extremely low-birthweight children, Hiroaki Nagatomi, Naohiro Hohashi, 9th International Family Nursing Conference, 2009年6月4日，Sudurlandsbraut・Reykjavik（Iceland）
⑳Family functions of single-parent households in Japan, Yuko Hiratani, Naohiro Hohashi, 9th International Family Nursing Conference, 2009年6月2日，Sudurlandsbraut・Reykjavik（Iceland）

〔図書〕（計1件）
①新しい家族看護学：理論・実践・研究，法橋尚宏編集，メヂカルフレンド社，2010年2月（437ページ）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.familynursing.jp/

6．研究組織
（1）研究代表者
法橋　尚宏（NAOHIRO HOHASHI）
神戸大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：60251229

（2）研究分担者
小林　京子（KOBAYASHI KYOKO）（H21）
自治医科大学・看護学部・講師
研究者番号：30437446
深堀　浩樹（FUKAHORI HIROKI）
東京医科歯科大学・保健衛生学研究科・准教授
研究者番号：30381916
濱本　知寿香（HAMAMOTO CHIZUKA）
大東文化大学・経済学部・准教授
研究者番号：00338609
堀口　和子（HORIGUCHI KAZUKO）（H22）
兵庫医療大学・看護学部・講師
研究者番号：30379953
本田　順子（HONDA JUNKO）（H22, H23）
神戸大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：50585057

（3）連携研究者
なし